

熊野の徐福を訪ねて

2013 年 9 月 9 日

神奈川徐福研究会 伊藤健二

1 はじめに

新宮市では毎年「徐福」を偲び、「徐福」の遺徳に感謝の気持ちを表すため、「徐福万燈祭」が開催されていますが、今年も神奈川徐福研究会の田島孝子会長は新宮市長から招待状をいただきました。同研究会のメンバーに、新宮出身の津越由康さんがいて、ちょうど車で故郷に帰るので、8月11日、河野通広さんと私を含め、4人で津越さんの運転する車で新宮に向かいました。12日午後に式典参加し、夜は新宮徐福協会及び新宮市の職員との交流懇親会に招かれました。また式典の前後には、津越さんの案内で、徐福の伝承地だけでなく、世界遺産となった熊野三山を初めとする熊野信仰の歴史遺産、また海と山が織りなす熊野のすばらしい風景を見て回り、14日午後勝浦からJRで帰路につきました。

今回の旅行では、私が興味を持っている、「徐福」「道教」「修験道」の関係を考える上での手がかりが得られたのが大きな成果でしたので、この観点から旅行記をまとめました。

なお案内していただいた津越さんは、神社などに対する知識が豊富で、記事の多くが津越さんから伺ったことを基に、津越さんからいただいた徐福や神社に関する資料、書物、公式ホームページ等で確認したものです。

2 徐福公園で供養式典

新宮駅の近くにある徐福公園内には、江戸時代初期に紀州藩によって建立されたという徐福の墓があります。墓の周辺の整備は以前から進められてきましたが、平成になってから中国風の門、徐福像等を建設し現在は徐福公園となっています。

12日午後、この徐福の墓の前で供養式典が開催されました。外部からの参加者は、神奈川徐福研究会の4人の他、大阪の徐福研究者である



徐福像

石川幸子さん、香港徐福会で浜松市在住の田中良司さんの6人でした。徐福というと神道の印象が強いが、この式典では、新宮仏教会の住職14人が読経する中で参列者が墓前に線香をあげました。式典の初めに爆竹をなしたり、チャイナ服を着た子供達が茶の接待をしたりして、中国風の演出がうれしかった。



徐福公園入り口



徐福の墓

徐福の縁 交流が広く深く

2200年前の遺徳しのぶ

「徐福万燈祭」(同祭連営委員会・西義弘委員長主催)は12日、JR新宮駅近くにある徐福公園で供養式典を行った。新宮徐福協会や市、市議会の関係者のほか、国内外から関係者約30人が参加。新宮市に渡来伝承が残る古代中国の方士・徐福をしのんで線香を手向けた。

毎年13日の新宮花火大会に先駆けて行っている。徐福は約2200年前の秦の始皇帝の時代、不老不死の仙薬を求め、多数の童男童女を引き連れて日本に渡来し、中国の先進文化を伝えたといわれる方士。新宮市や三重県熊野市ほか日本各地に渡来や定住の伝説が残る。



「徐福の墓」に手を合わせる各地の徐福関係者

やってきた。墓前に徐福さんゆかりの地やゆかりの方々と交流が深まりつつあることを報告させていただく。徐福友好交流はまさしく平和友好交流などといえよう。「天

変地異を含め混とんとした今だからこそ、友好交流の意義を声高に訴えたい」と語った。西委員長は「当時、未開であったこの地にとどまれ、土地をひらき、

農耕や捕鯨の術を教えられ、この土地の先覚者となられた。この土地の人々はあなたのなした多くの功徳に感謝している」と語り、祭詞を読み上げ、「どうかながく安らかに、新宮市の発展ならびに日中両国はもとより、徐福の縁につながる多くの人々と日本国内伝承地のより一層の繁栄と

友好、永遠の平和にお導き、お守りを」と祈りをささげた。

新宮仏教会の僧14人が読経する中、参列者一人が公園中央の「徐福の墓」の碑前に作られた祭壇に進み、線香を手向けて徐福の遺徳と古代からの交流に思いをはせた。

神奈川徐福研究会の田島孝子会長(71)は「お盆にこのような行事に参加できるのは心があらたまる。徐福万燈祭という形で催しをしているのは日本でも新宮だけ。5回目の参列だが、心にしみわたる」と話していた。

少雨の影響、川舟下

7月降水量が平

少雨の影響を受けて、世界遺産の川の参詣道を巡る「熊野川川舟下り」の運航が10日から中止になっている。川の水量が不足し、ダム放水も盆期間には行われないため、和歌山地方気象台によると、7月1日から8月1

日までの新宮の降水量は168・5ミリで、平年比47%にとどまっている。川舟下りは、新宮市熊野川町田長(こまなが)で



式典を伝える「紀南新聞」。このほか「熊野新聞」でも大きく報道された。

式典の様子は翌日の地元の新聞に取り上げられました。

式典終了後、新宮の徐福研究のさきがけとなった奥野利雄先生の自宅を訪問し、線香をあげさせていただきました。2011年の水害により、熊野地方は甚大な被害を受けましたが、奥野先生の家も床上まで水につかって、畳の部屋はフローリングの床に替えたそうです。



徐福の墓前で僧侶による供養

この日の夜、新宮徐福協会主催の懇親会が開催されましたが、来賓の6名が招待され、主催者側からは、新宮徐福協会の西義弘副理事長、仲田恵子理事、山口泰郎理事、鈴木俊朗理事（新宮市経済観光部長）、新宮市の赤松勇人商工観光課主幹、津越紀宏商工観光課係長が出席しました。楽しく懇談ただけでなく、料理は初めて食べる新宮地方ならではの、おいしく珍しいものでした。徐福の研究は、内容が面白いというだけでなく、徐福研究を通じて国外、国内の方々と楽しい交流を持てることが大きな魅力です。



中国服の子供達による茶の接待

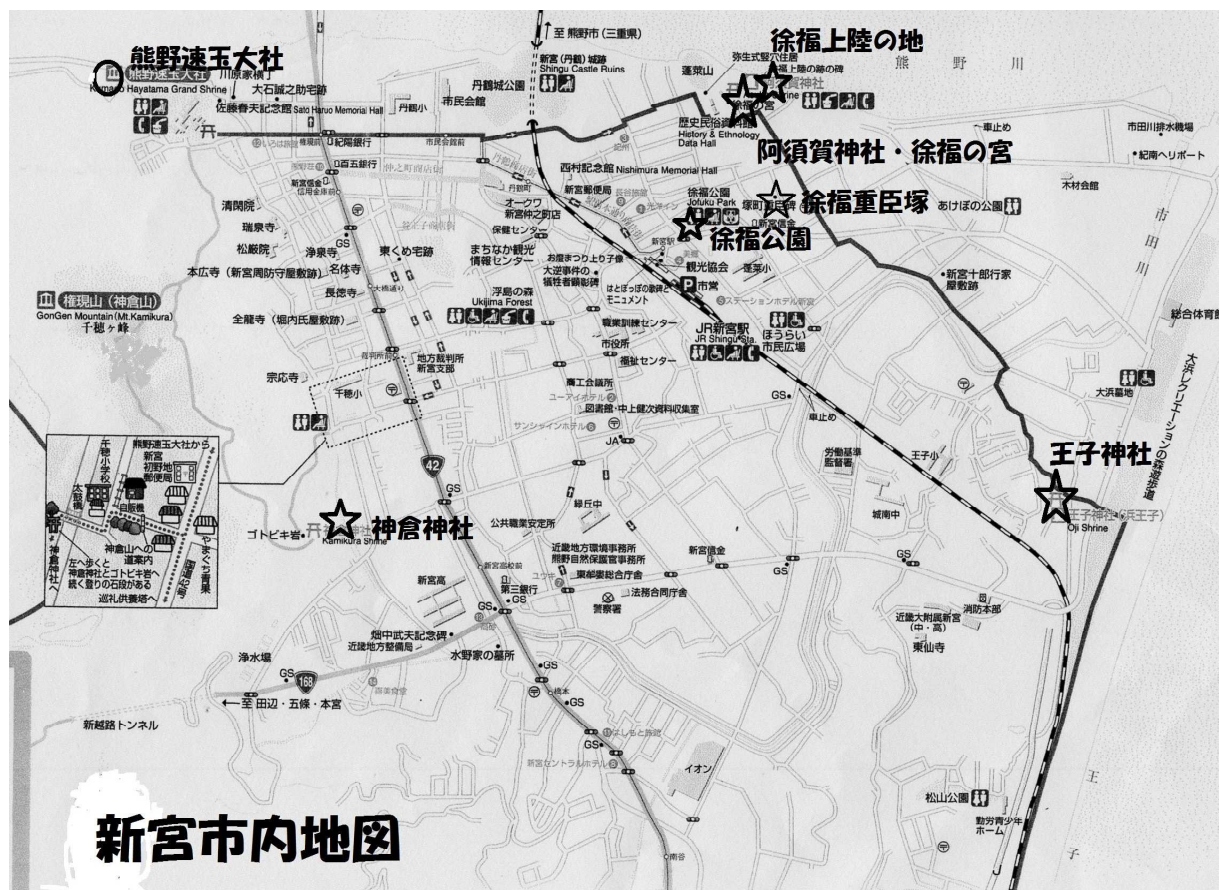
翌日の夜は「熊野徐福万燈祭」が行われ、新盆の方々の供養が行われたあと、花火大会が開催され、最前列の席で、迫力のある花火を楽しませていただきました。



懇親会

3 新宮の徐福

新宮には、先に紹介した徐福公園内のほかにも、徐福ゆかりの地がいくつかあり、そのほか熊野速玉大社（新宮）や、多くの史跡がある。直接徐福には関係がないようなものでも、徐福を感じさせるものが多い。



① 熊野速玉大社(新宮)

熊野三山の一つ。御祭神は「熊野速玉大神（くまのはやたまのおおかみ）」と「熊野夫須美大神（くまのふすみのおおかみ）」の二神。この二神は「イザナギ」と「イザナミ」とされているが、古事記の神々にされたのは後世の話である。その他の熊野三山などの熊野の神々も、元々は古事記にない神々であり、興味がそそられる。なお、伊邪那岐は徐福だと言う者もいる。

「新宮」は熊野三山の一つである「本宮」の分家のように誤解されるが、もともとは近隣の神倉山の磐座に祀られていた神が、現在地に移ったもの。神倉山にあった元宮に対して現在の社殿を新宮とも呼ぶ。

② 神倉神社

新宮市内からよく見える権現山の山腹に、巨石がご神体として祀られている神倉神社がある。我々四人は汗をかきながら 538 段の階段を登り、やっと到着した。スサノオ等の古事記の神々が登場する前、日本の神道は自然崇拝であったが、この時代からの自然石をご神体とする磐座（いわくら）である。現地の案内表示によれば、熊野三山の神の降臨の場所とされ、また神武天皇の東征の時に立ち寄った天磐盾（あめのいわたて）であると説明されている。神武天皇は徐福だという人もいる。ここはかつて修験者の行場として栄えたが現在は礎石が残るだけである。



神倉神社のご神体「ごとびき岩」

③ 阿須賀神社（境内に徐福の宮）

熊野川のほとりに小高い「蓬莱山」があり、ここも元々は原始神道の自然崇拝であったと考えられる。この神社の境内に、1986 年に再建された「徐福の宮」があり、徐福が祀られている。津越さんの友人でもある阿須賀宮の西俊行宮司は、宮司とはとても思えない気さくな方で、横笛がとてもうまい。我々にもきかせてくれたが、神社の静かな雰囲気の中で、透き通るような音色は荘厳な気持ちにさせてくれる。

2013 年 1 月、西村京太郎の推理小説『南紀新宮・徐福伝説の殺人』が発行されたが、この中に徐福宮の宮司と称する、笛のうまい宮司らしからぬ風貌の人物が登場する。このモデルとなったのが西宮司だ。

神奈川徐福研究会では一昨年、中国の「慈溪市徐福研究会」が作成した連環画（漫画）『徐福東渡の物語』の日本語訳を発行したが、これを新宮徐福協会及び西宮司に進呈したところ、これが新聞記事となったので、次のページに紹介します。



阿須賀神社で笛の演奏を聴く



笛を演奏する西宮司



徐福之宮前で寄贈本を手にする西宮司

和訳版・中国の徐福の本寄贈

裏表紙には新宮の墓の写真も

神奈川徐福研究会の田島孝子会長や津越由康さん、河野通広さん、伊藤健二さんが12日、新宮市の徐福公園を訪れて徐福万燈祭（同祭運営委員会主催）の供養式典に参加した際、近くの阿須賀神社にある徐福之宮などにも参拝し、同神社の西

俊行宮司に徐福の本を寄贈した。

中国、浙江（せつこう）省寧波（ねいは）市の慈溪市徐福研究会が出版した『徐福東渡的故事』を、神奈川徐福研究会が日本語訳した連環画『徐福東渡の物語』。連環画とは紙芝居のように絵に文章

が付いたもので、徐福の修行時代から秦（しん）の始皇帝に使えた時代、日本に渡ってから時代など順を追って紹介している。中国語の文章に日本語訳が加えられ、分か

りやすいよう工夫。慈溪市と佐賀県の関係が深いことから「徐福が新宮にきた」という記述がないのは残念ながら、裏表紙には徐福公園に建つ墓の

写真が掲載されている。作家の西村京太郎氏がデビュー50周年の今年に出版した人気の十津川警部シリーズ『南紀新宮・徐福伝説の殺人』を田島会長らが読み、作品に登場する阿須賀神社と西宮司に興味を持ったことから、西宮司の知人である津越さんの案内で訪れた。『徐福東渡の物語』は市商工観光課にも約30部が寄贈された。同課によると、新宮市立図書館にも間もなく2部ほど進呈する予定という。

商店街と連携し特典

25日まで
感謝デー
キャラクターもPR

新宮信用金庫（浦木睦雄理事長）は新宮市内の駅前本通り、丹鶴、仲之町、谷主子、元町、神倉の各商店街の協力で15日から25日まで「第9回しんぐう信金お客様感謝デー わくわくセール」を実施する。21店舗が参加、割引やポイント増などの特典がある。

月の15日の年金支給日前後に実施している。信金各店舗に協力店とお得な情報を掲載したチラシを設置。利用者に配布し、商店に出向いて買い物してもらう企画。

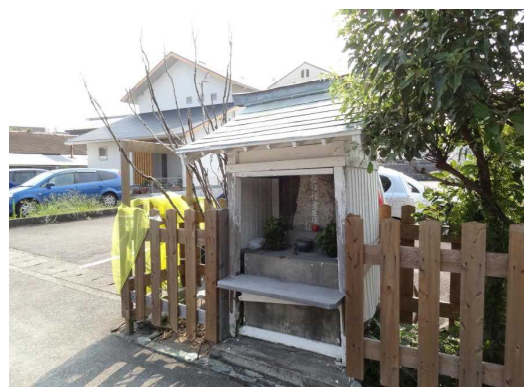
参加店は、文具、スポーツ用品店、衣料店、電器店、菓子店、飲食店など。チラシを持っていただくと、各店舗で特典が受けられる。また、キャラクターのグッズもPRしている。

神奈川徐福研究会で編集した翻訳本が、新聞記事になる。

④ 秦徐福重臣塚

新宮の塚町の道ばたに、徐福の重臣を祀った三角形の自然石でできた塚がある。以前はこのような塚が7つあったが、他の塚は失われてしまい、大正時代、ここの塚を復元整備したそうだ。同じく大正時代、徐福公園にも七塚の碑として石碑が建てられた。

「塚町」という地名が現在も使われていることが嬉しく思う。



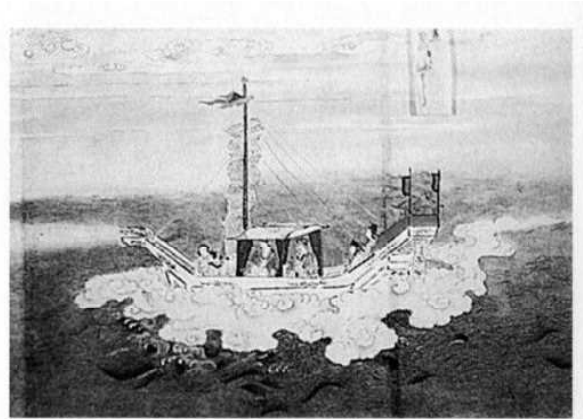
秦徐福重臣塚

⑤ 王子神社(浜王子)

熊野古道を歩くと、所々に王子神社がある。王子とは熊野権現の御子神とされ、参詣者を庇護した。王子の設立は、中世熊野詣において先達をつとめた熊野の修験者によるものということだ。最盛期には80を超えたというが、明治政府の神社合祀令により、多くは破壊され、現在残っているのはわずかだ。ここの浜王子も明治時代に一度廃された。しかし和歌山県出身の博物学者、生物学者である南方熊楠（みなかた くまぐす）らは神社合祀に対し激しい反対運動を行い、各地の王子神社破壊の様子も生々しく記述している。南方らの反対運動が実り、大正9年、議会で「神社合祀無益」と決議され、この浜王子も地元の力で大正末に復社した。しかし各地の伐採された鎮守の森が元に戻ることはできない。

現地の案内看板に、元享2年（1322年）領主の豊島近太夫が、武蔵国豊島郡の飛鳥山に分霊を移した、と書いてあった。飛鳥山は現在は北区であるが、以前は豊島郡であり、ここには現在も王子神社があり、近くにはJRの王子駅がある。

池上正治著『徐福』238 ページに、王子神社に残された絵巻が掲載されているが、船にのった徐福一行が描かれている。新宮の「阿須賀」も古地図では「飛鳥」と記されており、東京の王子神社がある飛鳥山も新宮の阿須賀に関係すると思われる。



神社の絵巻に登場する徐福ら一行（東京都王子神社）
（池上正治著『徐福』より転写）

4 熊野市の徐福

「熊野」、という地名は非常にわかりにくい。行政区分ではなく、和歌山県と三重県の紀伊半島南半分を総称して「熊野」と言い、共通の地域文化を持っていた。日本書紀の記述の中に、神武東征のとき立ち寄った、熊野神邑（みわのむら＝現新宮市）、イザナミを葬った熊野有馬村（現熊野市有馬町）などが見られる。

和歌山県の新宮は熊野地方の中心地として栄え、三重県の「熊野市」は、昭和29年、町村合併であらたに誕生した市だが、いずれも歴史が豊かな「熊野」の地だ。

この熊野市にも徐福伝説が存在する。

① 徐福の宮

徐福を祀る徐福の宮は、熊野市波田須（はだす）にあるが、波田須の地名は、古くは「泰住」と記されていたそう。国道から小型車がやっと入れる狭い路の急斜面を下った集落の中にあった。「矢賀の蓬莱山」とも呼ばれる小高い丘に巨木が茂り、遠くから眺めると海を背景とした美しい農村風景を形作っている。そこには「徐福の宮」が



徐福の宮と守り抜いた鎮守の森

神社は、アマテラスだとかスサノオなどの古事記の神々を祀るのが当たり前のように思われているが、地域に功績のあった人を祀るモニュメント的な神社も多くある。しかし明治政府は国家中心の祭祀体制の形成のため、合祀令により多くの神社の統合を進め、また国家神道にそぐわない神々を退けた。特に三重県や和歌山県は合祀が激しく、残った神社は六分の一以下と言われる。明治時代の「徐福の宮」を取り巻く歴史環境がどのようなものであったか、興味が持たれる。

The map displays the following locations and features:

- Cities and Towns:** Kumano City (熊野市), Shingu City (新宮市), Mie Prefecture (三重県).
- Landmarks and Temples:** Koyasu-dera (高野寺), Nachikatsuura-cho (那智勝浦町), Nachikatsuura-cho (那智勝浦町), Nachikatsuura-cho (那智勝浦町), Nachikatsuura-cho (那智勝浦町).
- Roads:** National Route 169 (国道169号), National Route 42 (国道42号).
- Geographical Features:** Mountains (e.g., Mt. Kuroko, Mt. Nachi), Rivers (e.g., Nachi River).
- Other Labels:** Kumano Shrine (熊野神社), Kumano Taisha (熊野大社), Kumano Hongu Taisha (熊野本宮大社), Kumano Gokoku Shrine (熊野国分寺), Kumano Sanjo Inari Shrine (熊野参詣道伊勢路).

- 7 -

② 徐福文字岩

熊野市の街中に急に切り立った岩が現れ、そこに漢詩が刻んである。

驚去徐仙子 深入前秦雲
借問超逸趣 千古誰似君
梅華仙史題

「徐福は秦より去り蓬萊の国仙境へ進んで深く入った。問うてみたいものであるが、世俗を超逸した趣は千古の昔から、君に及ぶものがあるだろうか。」（訳は『ロマンの人・徐福』奥野利雄著による）

寛政7年（1795）伊勢の医師、橋南谿（たちばななんけい）の詠んだ詩を刻んだものだそうだ。



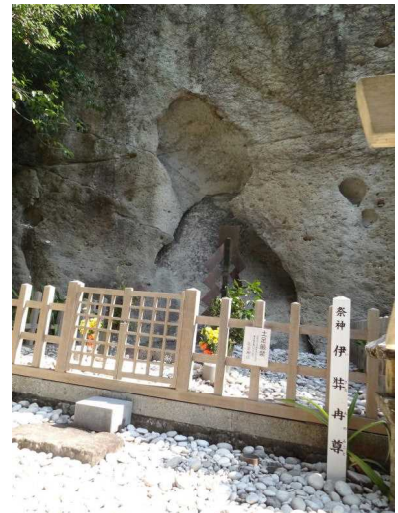
徐福文字岩

③ 花窟神社（はなのいわやじんじゃ）

巨岩である磐座（いわくら）が神体

『日本書紀』（神代卷上）一書には、伊弉冉尊（イザナミノミコト）は軻遇突智（カグツチ、火の神）の出産時にやけどで死に、「紀伊国熊野の有馬村」に埋葬されたとあり、それが当地とされている。しかしここも元々は原始神道の霊場だったのであろう。

近くにはイザナミノミコトが、カグツチを生み落としたと伝えられている場所に産田神社がある。



高さ 45 m の巨石の拝所

④ 丸山千枚田

熊野市から熊野本宮大社に向かう熊野古道の丘陵地に棚田が広がる地域がある。今回も式典に参加した、大阪の徐福研究家、石川幸子さんが以前ここを訪れ、情景を記述した美しい文章を紹介いたします。

「その途中思いもよらない風景に出会いました。突然眼下に視界が開けたのです。「丸山千枚田」です。それはまるで稲作文化を彷彿とさせる絶景でした。語り部に聞くと、少なくとも 1600 年代には、2200 枚の棚田が存在した記録が残されていたのです。」

田植えの時期を迎えた棚田の中をゆっくり歩いて見ました。黒潮の通る雄雄しい熊野の風土の中に、このように穏やかな風景があるとは、思ってもいませんでした。あたかも、2200 年前、徐福一行が熊野に着き、この地にも稲作を伝え、民たちが穏やかに暮らす風景が、私の脳裏に映し出されました。もしかすると、これが徐福が理想とした風景なのかもしれません。」



丸山千枚田

5 熊野三山、熊野古道と修験道

熊野三山とは、熊野速玉大社（新宮）、熊野本宮大社、熊野那智大社の3つの神社の総称。本来は神仏習合の修験道の寺社であったが、明治時代の神仏分離令により現在は神社となった。三社とも神社と一体となり仏教寺院の建物があつたが、廃仏毀釈により、那智の青岸渡寺以外は全て破壊されてしまったが、青岸渡寺は大きすぎて破壊できずにいたので、現在に残されたとのことだ。熊野三山は、参詣道である熊野古道、周辺の社寺を含め、平成16年、世界遺産に登録された。



熊野古道で出会った巡礼者？

① 那智山青岸渡寺

熊野那智大社と同じ敷地（現在は区分されているが）に豊臣秀吉により再建された那智山青岸渡寺の建物が残されており、神仏習合の雰囲気が強に残っている。「青岸渡寺」の名前の由来は、資料や公的なホームページでは確認できなかったが、道教の神仙思想からきているのではないかと考えられる。

なお青岸渡寺は、観音信仰の霊場である「西国三十三所」の第一番札所となっているが、これは12世紀、上皇などの熊野詣でが盛んになったことから、順序が一番に替えられたということだ。



破壊を免れた那智山青岸渡寺

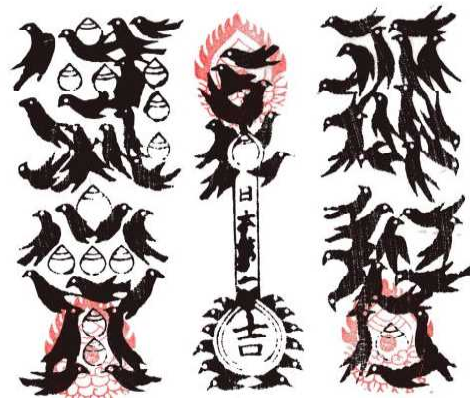
② 符札（牛王符）に残る道教の影響

熊野三山はいずれも符札（牛王符）を販売している。護符としての利用法のほか、牛王符の裏面に起請文を書くことにより内容を熊野権現に対して誓ったことになる誓約書用紙として用いる。修験者が売り歩くことにより、彼らの収入となった。

この符札は道教でも用い、道教の呪文が用いられていることもあることから、中国道教からきているとされている。（『図説 日本の仏教 六 修験道の歴史と修験』による。）



那智大滝を背景に記念撮影



那智大社の符札

③ 補陀洛山寺 補陀洛渡海は道教の神仙思想を思わせる

熊野古道沿いに、休憩や宗教行事のための「王子」と呼ばれる社がおかれ、現在いくつかが王子神社として残っている。新宮の王子神社についてはすでに記述したが、那智山の海岸近くにも「浜の宮王子」が残っている。この同一敷地とも言える隣接地に、補陀洛（ふだらく）山寺がある。平安時代から江戸時代にかけてこの寺から三十数回、僧侶が小さな船に閉じこもり 30 日分の食糧をたずさえて、南海の彼方にあると信じられていた観音浄土を目指す「補陀洛渡海（ふだらくとかい）」が行われた。「ふだらく」はサンスクリット語で、南方の彼方にある観音菩薩の浄土「ポタラカ」の音訳だというのが、海の彼方に仙人が住むという道教の神仙思想と似通っている。



補陀洛渡海船の原寸大模型

④ 修験者が徐福伝説を伝えたか？

修験道は、山で修行を行う山岳信仰に仏教や神道が取り入れられた神仏習合の宗教だ。修験道の実践者を修験者または山伏という。修験道は、また不老不死を求める道教の神仙思想の影響を強く受けているという。熊野、佐賀県の金立山、富士山、男鹿、小泊など、徐福伝説のある地域の多くが修験道の聖地であり、徐福研究者の多くも修験道と徐福伝説の関連を指摘している。全国を歩いた熊野の修験者が徐福伝説を伝えたのだろうか。

ところで誰が道教を日本に伝えたのだろうか？「徐福が渡来したときに直接伝えた」、と思いたいところだが、徐福の時代までさかのぼる道教の痕跡は確認されていない。また道教が組織的に日本へ伝えられた形跡はなく、留学僧、留学生、渡来人等が持ち込み、仏教などと習合したのではないかと推測されている。

6 終わりに

今回の旅行では、記事で紹介した以外にも、昔の面影を残す熊野古道、自然が作り出した海岸の奇石、丹鶴城趾等を案内していただきました。熊野地方は歴史の宝庫であると共に海と山の自然が美しい地域でもあります。

徐福に関しては、熊野地方では江戸時代以前から徐福伝承が深く民衆に根付いています。今日にいたるまで、徐福の伝承を大事にして、行政が先に立ち徐福をもり立てていることを知り、大変嬉しく思いました。

修験道と徐福との関わりも改めて感じさせられました。今後は各地の徐福伝説と修験道の関連について検討していこうと考えています。このため、各地の徐福研究を行っている方から、修験道と徐福伝説との関連の情報をいただければ、ありがたいです。

〒 252-0807 神奈川県藤沢市下土棚 1 8 2 5 - 5 伊藤健二

e-mail xufu@krd.biglobe.ne.jp